漸醉樂眠水枕閑、海烟歛處碧連環、遠山緩去近山走、俯仰蓬窓一尺間、

秋夕閒咏

身是飛禽似倦還、柴桑下宅鎖門關、霜叢深處蟲吟露、山霧晴時月吐山、連屋風松奏淅瀝、隔籬野水送潺湲、輕肥奔走塵中客、不識人間有此間、

批評

前號雜評

龍南生

龍南生に一癖あり、甚た他人の著作文章を評するを好む、而も自ら文を草するを欲せす。熊本に來りてより既に數年、龍南會雜誌を讀むこと十數回に及ふも、作者の咎を受けんことを畏れて未た批評を試みたることなき。然れとも性癖變すべからず、抑制の余殆んと狂を發せんとす。是に於てか敢て數言を陳ぜて、作者其人の教を請ふ所あらんとす。待ちに待ちたる龍南會第三十八號翩々と來る、手に任せて之を披き見るに、材料富み文辭豐かに、趣味淡々、獨り評ぜ獨り讀ム、須臾にして讀み終る。乃ち評語を筆にして、謹で本誌の余白を汚すに至る。

論說欄內第一に掲けられる內田教授の『老子の文章を評す』は、問題頗る高尙にして漢文哲學の部類に屬ぜ、吾等淺學の喙を容るべきものに非す。加ふるに未た教授の高說の端緒に過ぎざれば、完結の上改めて卑見を述ふる所ろあらんとす。湯原教授の『武士道の趣味』、隨分長篇ならんと思ひの外本篇にて完結せしは、頗る遺憾に思はさるに非す。三十七號の五ヶ條に對しては、殆んと述ふべきところなし。思ふに本篇に於て、教授の主眼とせらるゝところは、武士道の趣味は審美學上より解釋せざるべからずといふ一點に存するが如し。三十七號に於ける五ヶ條の說明、及び前號に於ける身体前後の

構造の說明とは、之を証明するに足りて愚生の疑を容るゝところなし。たゞ教授かヘルバルト、ハルトマン等の說を引き來りて、美と德との關係をのべ、遂にこれより武士道をば從前の學者ら武士特有の道德と誤認せしとまで論せらるゝに至りては、愚生少しく疑なき能はず。固より從前の學者は、美と德との關係に付て今日の如き明白なる智識を有せさりしならん。然れとも武士道は武士固有の道德なりといふは、必すしも誤謬の說には非るか如し。

思ふに眞正に武士道を論するものは、必す次の二つの方面よりせさる可からず。道德學上幷びに審美學上これなり。道德學上よりは、武士の理想の標準となるところの武士道の道德を論じ、審美學上よりは武士の行爲の摸範となるところの武士道の趣味を見る。かくの如くして始めて、武士道の全体を窺ひ知ることを得べ玄。單に武士道を道德上より論じて、審美的趣味を云はさるものは非なり、單に之を審美學上よりのみ論ゑて、道德上より論せさるべきものとする者も、また或は非なるなきを得んや。若ゑ一歩を進めて之をいはゞ、武士道は之を二つの原素に分つべし。曰く武士道の理想、曰く武士の趣味。武士道の理想は卽ち道德學上の問題にして、其趣味は卽ち審美學上の問題なり。教授はの給く『前に學けたる事實は、総て審美的趣味に基き、之を恥ちとするは、此の趣味の深くも之を厭へばなり』と。然り、之を恥ちとするは、此の趣味の深くも之を厭へはなり。然れ共、之を恥ちとして之を爲さゞるは、禮義廉恥を重んすといへる、武士道の理想の現實するものには非さるか。これ愚生か服する能はさる第一點なり。

今一歩を讓りて、以上の行爲には廉恥を尊ふといふ道德は、關係せさるものとするも、從前の學者か武士道の骨髓としたる、君恩を重すること、節義を守ること、禮義を貴ふこと、身命を惜まさること、嫉妬と利慾心を去ること、信義を守り然諾を重すること、等の數條は悉く之を審美學上よりのミ、解釋するを得べきものなりや。これ少ゑく疑なき能はす。これ愚生か服する能はさる第二點なり。殊に教授か最後に論せられたる厚生利用の道と、武士道の趣味との間に存する關係は、審美學上より之を

如何に解釋し給はんとするか。愚生は寧ろ之を當時の時勢上より、幷ひに質素儉約を守るべしといへる武士道の教訓より、之を解釋せんと欲す。これ愚生か服する能はさる第三點なり。思ふに教授必す高説あらん、願くは江海の量を以て、愚生妄言の罪を容れ、爲めに教示せらるゝあらんことを、懇願の至りに堪ゑず。

荒木大藏氏の『吾人學生の任務』滔々數百千言、六頁餘に亘れる長文なれ共、詮するところ、一片の感を述へたるものにして、系統ある議論をなさず。約言すれは次の數言にていひ盡さ得べし。曰く國家は必す存せさるべからず。教育は國家を維持する爲めに、人材を養成するものなり。吾人は高等の教育を受くる者なれば、其責任重大なり。優勝劣敗は止むを得す、已むを得さる場合には、凶器を動かさゝるべからず。今日の時勢は大決心を要するの時なり、故に吾人學生は非常に勉强せさるべからすと。其主意のあるところ明々白々、批評するの餘地なし。たゞかゝる尋常一般の題目を捉へ來りて、數千百言を列へ得たる氏の技倆を賞贊するのみ。羽生教授の一文惜むらくは、單に想像力を用ゐて殺人を行ひ得ることを述へられさに止りて、尤も肝要なる問題たる、法律學上の觀察に至りては、一言の論及せらるゝところなさ、遺憾々々。思ふに必す、深意の存するあらん。岩脉及鑛脉に關する篠本氏の文は、門外漢にては評することを能はず。『嶋津泰清公の遺事』は完結の上に讓り、大野禧一氏の『信する所を明にす』に至る。此篇又荒木氏の文と略、同一轍、文脉殆んどたつぬべからす。只其文章に至りては、大に精練琢磨したるものゝ如く、字句の間氏の苦心を看取するに難からず。勉めて止まずんば、必す他日造詣するところあらん。氏其勉旃せよ。

十八萬空逸士の『武士訓を讀む』は、疑なく前號中の大文章なり。逸士は先つ篇首に述へて曰く『本書を評するにあらず、武士道其者を論するにも非ず、德川時代の武士の有樣をば歴史的に研究し、併せて少しく述へんとするなり』と。愚生はこゝに於ても又、作者か武士道其者を論せられざりしを憾む。然れとも、是れもとより作者の主眼に非されば、敢て逸士を責むべきに非ず。評者は只、作者か果して

德川時代の武士の有樣をば、歷史的に研究し得たるゝを見れば足れり。評者はこの點に關して、逸士の所說に滿足する能はざるものあり。何となれは本文の大半は、武士道の起源に關する議論と、武士訓の扱萃とにして、當時代の武士の有樣に付ては、たゞ武士訓の著者の理想は行はれずして、年々武士は墮落しつゝ行きたりといふの外、殆んど說く所なけれはなり。故に此點に關して逸士の所說は、全然不十分なりといはざるべからず。然らは、武士道の起源に關しては如何。此點に關しては、逸士の所說は稍々評者に滿足を與るに足る。而も評者は、何故に逸士か德川氏以前に溯りて、述ふるところあらざりしやを疑はざるを得ず。只家康の政略と宋儒の道とに關する所說に至りては、讀者に十分の好味を與ふへきものあり。故に此點に關しての逸士の成功は、一部分のみ、未た決して十分なりといふを得ず。最後に評者ゝ逸士に向て、感謝せさるべからさるところのもの一あり。武士道に關する武士訓の著者の理想、并びに武術に關する同著者の所說の明白に而も簡單に示されたること是なり。思ふに武士訓の全部を通讀するも、得るところはこれに勝る能はさるものあらん。逸士の成功は此點に關しては全然十分なり、評者は必すしも他の點に關して其不成功を責むべからさるなり。

評し去り評し來りて、忽ち筆の進まさるに遇ふ。筆を收めて稿案を復讀すれは、殆んど自ら自己の大膽なるに驚くべきものあり。是に於て再ひ筆をとる能はす、卽ち之を龍南會の函に投す。筆を止め自ら抑ゑて再び罪を重ねさるは、卽ち以上妄語の罪を償ふ所以なりと知れ。

雜報

新學年來れり

舊學年は苦熱と共に去り、新學年は秋風と俱に來りぬ。舊學年必ゝも苦熱の如く、煩燠厭ふべきにはあらさりゝかゝも、新學年は殊に爽涼喜ぶべきと、秋風颯として至れるに似たる感あり、これ吾儕の前途に將に進取すべき益々たる希望の